

台湾・震災復興社区総体营造（まちづくり）の「総体性」に関する研究

A Research on "Integrated" Disaster Reconstruction in Taiwan

服部 くみ恵¹

Kumie HATTORI¹

¹東京芸術大学大学院美術研究科文化財保存学専攻保存修復領域建造物研究室

Graduate School of Conservation for Cultural Property, Tokyo National University of Fine Art and Music

This paper presents a new paradigm of Community Renaissance and Integrated Community Development after 921 earthquake in Taiwan, which is named "Integrated Disaster Reconstruction". In this paper firstly it would be taken a brief look at 22 reconstruction projects after earthquake, and then, 3 case studies will be shown by using way of ethnology. The first case study relates "Shaobantian Community", the second one relates "Qingjing Farm Community", Ren'ai town. The last one relates to Shang'an Community in Shuli Town. Those communities are located in Nantou County and all places are damaged by the earth quake. The end of this paper the author would like to mention the character of current tendency of "Integrated Disaster Reconstruction" through brief look of outline of 22 reconstruction, and ethnography of three community's case studies.

Key Words : *Integrated Disaster Reconstruction, Shaobantian Community, Qingjing Farm Community, Shang'an Community*

1. はじめに—本研究の背景—

日本の「まちづくり」に相当する活動のことを台湾では「社区総体营造」或いは「社区营造」と呼んでいる。しかし、ひとくちに「社区総体营造」と言ってもその活動の内容は多岐に渡る。黄¹⁾らの定義にもとづくと、「社区総体营造」の活動には、以下のようなものが含まれる。それは、①文化財の保護活動②原住民（少数民族）に関する文化活動③客家に関する文化活動④自然環境の保護や生態保全に関する活動、⑤コミュニティの発展⑥台湾に関する文学⑦地方文史（郷土史再発見に関する）活動及びそれに関するフィールドワークなどの活動⑧民間による文化芸術に関連する諸活動、などである。

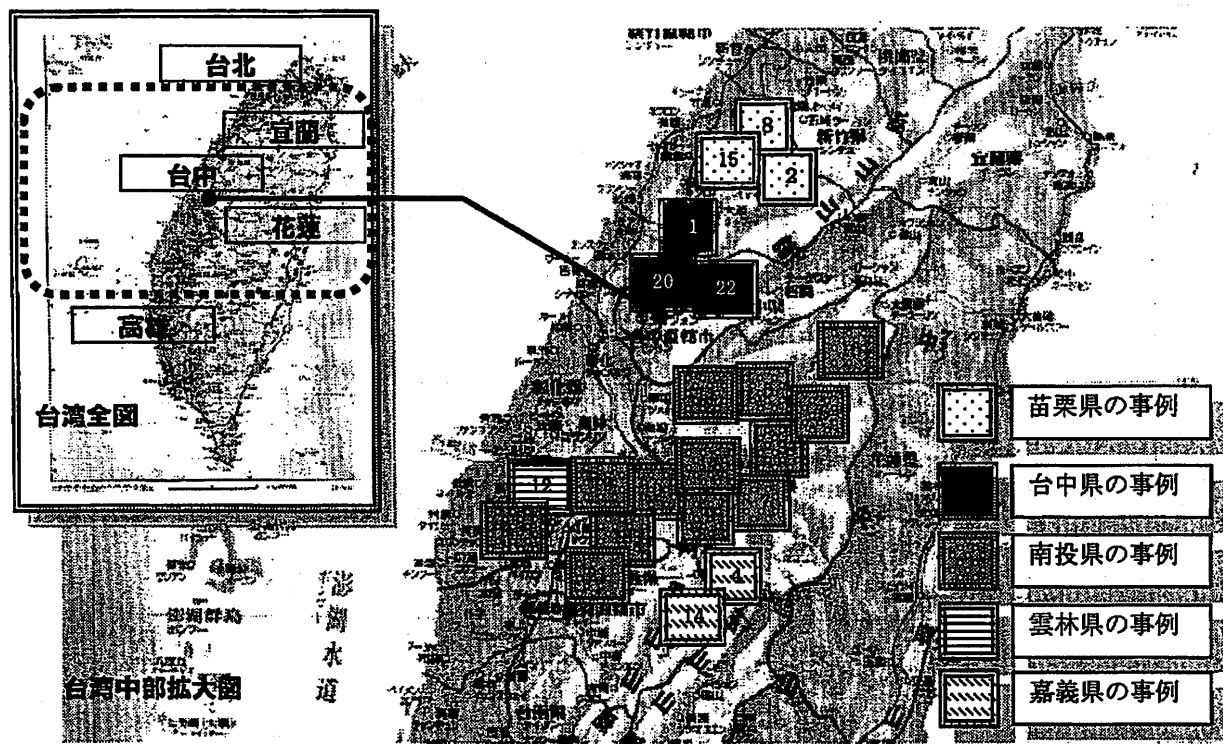
台湾で正式に「社区総体营造」という言葉が使われるようになったのは、1994年10月のことである。台湾の中央政府の行政院文化建設委員会²⁾が、「社区総体营造」と名づけた政策を提出したことに始まる。この「社区総体营造」が政策として政府によって推進されて行くまでには、それぞれの地方における草の根レベルでのさまざまな試行錯誤、また、地方政府文化局などの試行錯誤のプロセスがあると言われる。例えば、1980年代に台湾西部の鹿港や台北市のいくつかのコミュニティでの公害反対運動や環境改善のための活動が起こった。また、1990年代初頭には、台湾東部、特に宜蘭県において、住民参加型、或いは住民主体の村おこし・まちづくり的な「社区（総体）营造」という運動が行なわれて来ている。

1999年に9月21日起こった921大地震からの復興の過程においても「社区総体营造」は重視されている。とりわけ、震災復興のために成立した行政機関である九二一震災災後重建推進動委員会（以下、重建会と省略する）を初めとする台湾の公的機関は、住宅再建や生活再

建ということとともに、社区総体营造を震災復興のための重要な方向性であると考えた³⁾。このことから、台湾は震災復興が単にハードとしての建造物や、都市・農村の再建に終始するものではなく、地域の文化再生や被災者の心のケアなどをも含めた震災復興まちづくりを行なっていくことが台湾にとって必要であるということを公部門・民間共に認め、その方向に向かって震災復興を押し進めて来たということが言える。

ところで、台湾の震災復興という文脈における社区総体营造を英語に訳すと"Integrated Community Reconstruction"となる⁴⁾。以前の社区総体营造に関しては、英訳として、"Integrated"という単語が使われることが少なく"Community Runessance"などと訳された⁵⁾。震災以前と震災以後の社区総体营造の大きな違いについて、筆者自身は以下のように考えている。

震災以前の社区総体营造は、各コミュニティにおいて、単体の問題を見つけ出し、その問題を克服することによって住民が自信をつけ解決していくという単体的アプローチが多いように思われる。例えば先住民族の文化の再建、コミュニティの生活環境の改善、或いは、故郷にとって基盤となる産業を創出しようという運動など、コミュニティにおける問題意識と目標が比較的単一的、シンプルな様相を呈していた⁶⁾。ところが、震災以降の台湾中部の被災地においては、震災を経験したことで、地域が潜在的に持っていた複合的な問題—例えば、農業問題、先住民族の問題、民族間の対立の問題、高齢化問題、女性問題等—が複合的に露呈した形となってしまった。従って、震災復興社区総体营造は、以前の社区総体营造が処理していたようなシンプルな問題意識ではその問題を処理できなくなってしまったように思われる。このような震災で露呈した複合的な問題を、震災復興社区総体营



『グローバルアクセス (昭文社)』 p. 14 の地図を使用し筆者が作成、地図中の番号は表 1 の番号に対応している
 図 1 台湾震災復興まちづくり分布図

表 1 台湾震災復興まちづくり分布表 (現状編)

| 整理番号 | 社区の名称 | 活動内容の概観 | 整理番号 | 社区の名称 | 活動内容の概観 |
|------|-------------|--|------|-----------|---|
| 1 | 潭子郷 | 震災後発生した土石流によって破壊された自然環境を守るため住民が「以工代賑」で植林、花植え。 | 12 | 華山鎮 | カフェを使ったまちおこし。この地域で栽培されるコーヒーは、植民地時代に日本人によって開発された品種。 |
| 2 | 泰安郷、蘇魯社区 | 921大地震とそれに続く桃芝台風の復興の為、住民が自ら環境保全型工法で河川整備。 | 13 | 大溝境農場 | 震災直後から始まった自立的・自律的なコミュニティと、外部のボランティアとの協働による環境改善活動。 |
| 3 | 日月潭 徳化社 | 少数民族、サオ族の伝統的工法を使った住宅再建。 | 14 | 阿里山郷、遼邦 | 植物からの糸作り、糸の染色、織物作成という少数民族・布農(ブヌン)族の文化再生活動と、織物技術を記録として残す文化活動。 |
| 4 | 阿里山郷、山美社区 | 少数民族・鄒(ツォウ)族の伝統的生活再生とエコツーリズム。 | 15 | 泰安郷 象鼻社区 | 防災まちづくりコミュニティ活動。 |
| 5 | 埔里鎮 桃米社区 | 住民が地域の生態系について学ぶインタープリター養成講座で資格を取得しエコツーリズムの推進。 | 16 | 霧社・茹 担工作室 | 先住民、タイヤル・サイデック族の伝統的織物再生・それに伴う女性に就業訓練と雇用創出。女性達は民族文化に対して自信。 |
| 6 | 竹山鎮 | 伝統的産業の竹製品をトマトの包装に用い、商品に付加価値を付与。「竹山トマト」は有名に。 | 17 | 水里郷、永興村 | 自主防災コミュニティ。避難訓練の徹底化により、震災後に起こった台風の際に、1人の被災者も出さなかったコミュニティ。 |
| 7 | 魚池郷 大雁村 | ピンロウ栽培過多の産業から、紅茶栽培への産業転換。大雁アッサムは植民地時代に開発された。 | 18 | 中寮郷、龍安村 | 震災直後、住民自身の力によって救難・救助活動を多くの人々を救い出したコミュニティ。台湾大学の授業でも取り上げられた。 |
| 8 | 大湖郷 | 観光農園(莓)の経営と莓酒の開発。土産の販売場所に、歴史的価値のある農会の建造物を活用。 | 19 | 竹山鎮、瑞竹社区 | 地域住民が定期的な会議を開き、住民参加による防災マップ作成を行なった。 |
| 9 | 信義郷 | 過疎化の進む村の特徴を逆手にとり、若者の都会での仕事の経験を生かす。地元の梅農家と共同で梅酒を開発。梅中心のツーリズム。 | 20 | 石岡郷 | 地域の女性達による客家(ハッカ)料理レストランの創業と経営。地域の女性達の演劇への参加活動による心のケア。新しいブランドの梨の開発と女性達による営業活動。 |
| 10 | 鹿谷郷 小半天 | 村の人々が自主的に民宿を経営。村民給出で旅行者をもてなす。 | 21 | 中寮郷、南中寮 | 女性達の手で創作された草木染めによる産業の創出。女性達は植物への理解を深める。 |
| 11 | 國姓郷北港村 梅林社区 | 地域の小工事の殆どを住民が請負い水路水車など景観を再生。。 | 22 | 東勢鎮、大茅埔 | 地域の女性達による農産物加工品の販売。「外籍新娘(東南アジアなどから嫁いで来た花嫁)」の為の自発的な中国語講座の開講。 |

* 前述の記録映画『我們的故郷, 我們的故郷』に紹介された全ての事例を表にまとめたもの。

** 整理番号は、上記資料に出て来た順に便宜上つけたもので、それ以外に大きな意味合いは持っていない。

造 (Integrated Disaster Reconstruction) はどのように解決したのであろうか。また、震災以前の社区総体营造と、震災以降の社区総体营造の決定的な違いはどのようなところにあるのだろうか。

このような問題意識に従って次章では、総論的・概観的な震災復興社区総体营造の紹介を行なう。ここでは、重建会が、震災復興の典型的な事例としてその制作した映像資料において紹介している22の事例すべてを概観的に取り上げ、その方向性の概観や特徴について論じる。それを受けて、第3章においては、代表性をもった3つの事例の活動をその活動が進むようになった過程も含めて詳細に記述する。

ところで、日本では、921大地震後、台湾の震災復興に関する研究が盛んである。しかし、台湾の事例が異なった言語・文化・歴史を持つ海外の事例であることが忘れられる傾向にある。地域の中のコンテクストを理解しようとする姿勢を忘れ、日本的な感覚でそれを判断しようとする、事柄の背後にある大切なコンテクストを読み落としてしまう恐れがある。したがって、小論の第3章では特に一章分を割いて、民族学・文化人類学で用いられる方法論である、民族誌 (Ethnography) の方法にもとづき、現地の人々が行なってきたことに対する厚みのある記述 (Thick Description) を行った。また、この研究の方法論は異なった文化の中で行なわれる人々の営みを尊重する、文化相対主義 (Multi-Culturism) の考え方に立脚している。

小論の最後、第4章ではまとめとして、2章、3章において論じてきたことから、台湾の震災復興という流れの中での社区総体营造の特徴をまとめる。

台湾の事例は、日本において公的部門で震災復興や防災・減災に関わる建築・都市計画部門の人々のみならず、同じ公的部門でも、文化政策、文化財保存政策や景観保全、社会福祉政策に関わる人々にとっても非常に意義のある事例である。また、民間レベルで言えば企業のメセナ活動やNGO・NPOの人達、そして何よりも市井に生きる人々にとって、隣の島で生きる人々—台湾の人々が日々どのような努力を重ねているのか、そして、どのように自分達のコミュニティの危機を突破して来たのかということについて、示唆を与えてくれるところの多いものであると筆者が考えている。

2. 震災復興社区総体营造の概観と分析—ドミノ倒しのような連鎖—

前ページの表1・図1は九二一重建委員会の資料⁽⁶⁾及び筆者の現地踏査をもとに、震災復興社区総体营造が行なわれている地域・内容についてまとめたものである。これら図表から震災後、北は苗栗県から南は雲林県に至るまで、さまざまなコミュニティで異なった目的意識を持つ運動が展開されていることが分かる。次ページの表2・図2はそれに関連付けて発展させたもので、各々のコミュニティが震災前後に潜在的にどのような問題を持っていたかということを図表化したものである。特に、図2では台湾の戦後史の中でそれらの問題がどのように変容して来たかをまとめた。表1・図1と表2・図2を比較させて見て行くと、震災以前に台湾が持っていた問題・震災以降に台湾が持っていた問題と、それが現在、どのような手法で克服されようとしているのかを比較検討することが出来る。また、表2からは、台湾中部被災地の持つ問題点について、それらが個々独立した単純な

問題ではなくて、幾つかの範疇に渡っていること、また、それが連なって連鎖していることを知ることができる。

例えば、図1・表1及び表2の16番・霧社のケースを例に挙げると、この地域は地域の内部には就業の機会がなく(図2の【A】)、女性の夫は、働くためにさまざまな地域を飛び回り、アルバイト的な仕事をしてきた。家計が安定しないために、女性は暇さえあればお酒を手取るという生活を続けていた(【I】への連鎖)。震災後には、夫が失業してしまったが、夫婦共、就業の機会を見つけることができない(再び【A】に連鎖する)。また、この地域は少数民族の居住地域であり、これは台湾全体的な少数民族の居住地域に共通する問題でもある(【C】に起因する問題として【A】に連鎖している)。このような問題は、問題が問題と呼んでしまう連鎖的現象である。このように、問題が連鎖しているということは、震災以降の社区総体营造が、震災以前の非被災地における社区総体营造のように、ただ1つの問題を中心にして解決して行けばそれで良いというものではなくなってしまったということ、そして、それらの複合的な問題が、緊急性・切迫性を要していることと関連がある。

このような相互関連し合う問題の解決ということを考えて場合、問題の連鎖性というのは、一方で裏を返せば、1つの項目がプラスに働けば、それが次々とプラスの連鎖を起して行くことが可能であるということができるのかも知れない。このことは、さきほど例に挙げた16番の地域のケースが、図1・表1にあるように、女性の就業訓練をタイヤル族伝統の織物や染色と言った主題に基づいて行うことで女性を心理的に元気づけ(心のエンパワーメント)、就業の機会を創出するとともに、伝統的な文化を復活させた事例からも良く分かる。

次章では、図1・表1及び図2として例に上げた22のコミュニティの事例の中から、この「連鎖」を逆手にとって震災復興社区総体营造活動に従事している3つの事例について、記述して行きたい。

22件ある事例の中からすべてを紹介するのは難しいが、第3章で民族誌として取り上げる事例はそれぞれ以下のような特徴を持っている。

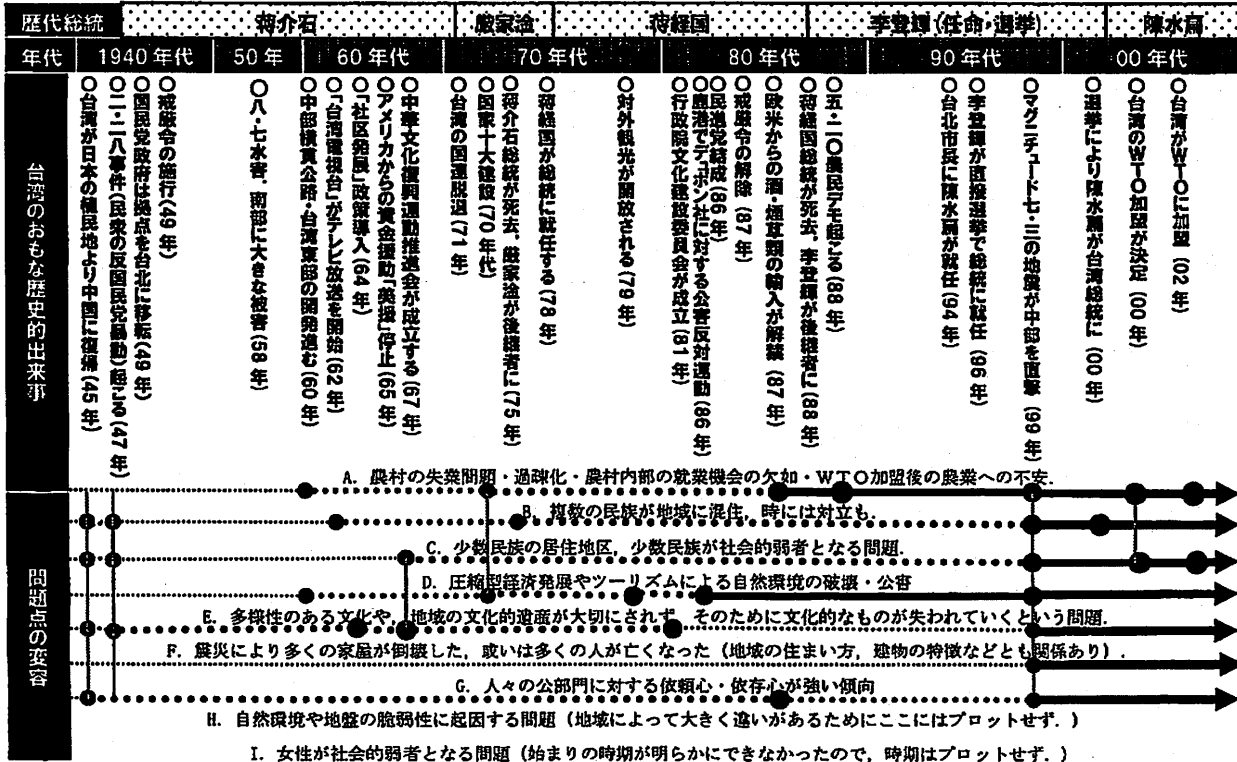
(1)において取り上げる「小半天」の事例は、被災地がいつまでも「被災地」としてあり続けるのではなく、それを乗り越えて、エコ・カルチュラル・ツーリズムを推進して行こうといくプロセスである。この事例を時系列的に追って行くことは、台湾中部数々の地域で現在進んでいるエコ・ツーリズム或いはカルチュラル・ツーリズム(文化観光)の1つの典型として代表性があると考えた。

次に(2)で取り上げる「大清境社区」の事例は、台湾を歴史的に取り巻く民族の問題を如実に反映している。服部(2001)は、少数民族の文化や客家の文化というものが、震災復興社区総体营造の主題として上げられることを書き、台湾において歴史的に少数のいわゆる「外省人(1949年に中国大陸から渡って来た人々)」が戒厳令を施行し、少数の人々が多数のいわゆる「台湾人」や客家、先住民族の文化や歴史を弾圧したという反省を踏まえ、台湾「本土」の文化と言われる客家・少数民族の文化の復興に向けられたことは大切なことだと評価している。しかし一方で評価をしながらも、コミュニティ単位で地域を見た場合、いわゆる「台湾人」の人々や、「客家」、少数民族の人々が地域のマジョリティになる地域も存在しているので、その場合に「外省人」の文化や、「外省人」と一からげにされる多くの人々の文化については考慮されていないのではないかと懸念を示して

表2 九二一大地震前後に各コミュニティが抱えていた潜在的な問題（一部利点）とその所在

| 番号 | 震災前後のコミュニティの状況(問題或いは利点) | 問題の所在 |
|----|---|-----------------------|
| 1 | ●産業の衰退により地域内部の就業機会が少ない, 失業問題, 地域が断層地帯に位置する. 【震災前後に共通する問題】/●震災で土石流発生, 田畑が破壊, 生態系の破壊. 【震災以降の問題】 | A, H |
| 2 | ●集落が大安溪(河川)に沿って位置する. 【震災以前からの問題】/●震災と桃芝台風で土石流が脅威. 【震災以降の問題】 | A, C, H |
| 3 | ●人口の流出, 就業機会の欠如, 失われる邵族文化【震災前後に共通の問題】/●地震での家屋の倒壊. 【震災以降の問題】 | A, C, E, F (家屋の倒壊) |
| 4 | ●外来者による魚の乱獲(電撃, 毒によるもの). 【震災前後に共通の問題】 | C, D, H |
| 5 | ●就業機会の欠如. 【震災前後に共通する問題】/●コミュニティに位置する家屋の8割の倒壊. 【震災以降の問題】 | A, F (家屋の倒壊) |
| 6 | ●伝統的な産業(竹加工業)の衰退. 【震災前後に共通する問題】 | A |
| 7 | ●基盤産業の檳榔(ピンロウ)栽培やバナナ農業の衰退, 失業問題. 【震災前後に共通する問題】 | A |
| 8 | ●伝統的な茶産業の成長の頭打ち. 【震災前後に共通する問題】 | A, H |
| 9 | ●伝統的な梅産業の成長の頭打ち, 若者人口の流出. 【震災前後に共通する問題】 | A, H |
| 10 | ○震災以前から自然景観の再生とツーリズムに力を入れる. 【震災以前の利点】/●九二一地震と桃芝台風でツーリズム関連施設が大打撃. 【震災以降の問題】 | H |
| 11 | ●震災による自然景観の破壊, 環境が荒廃してしまう. 【震災以降の問題】 | H |
| 12 | ●産業の衰退. 【震災直後】 | A |
| 13 | ●中国雲南省付近出身の「外省人」の歴史人の埋没. 【震災前後に共通する問題】/●高山部に位置するコミュニティであるため, 地震で交通が寸断. 【震災直後】 | B, E, H |
| 14 | ○環境保全を学ぶために桃米里を視察, 自然環境の大事さを痛感. 【震災直後】 | C |
| 15 | ●女性の失業問題, 交通が不便な場所に位置する. 【震災前後に共通する問題】/●災害時救難部門が現場に駆けつけにくい. 【震災以降の問題・震災経験より露呈】 | A, H, I |
| 16 | ●女性の失業問題, 女性(先住民族・専業主婦)のアルコール依存. 【震災前後に共通する問題】 | A, C, E, I |
| 17 | ●1959年の八・七水害から, 土石流などの災害が絶えない. 【震災以前からの問題】/●政府から土石流敏感地区として指定され村落移転を推奨されるが地域住民はこの地域への愛着が強く移転したくない. 【震災以降の問題】 | H |
| 18 | ○コミュニティの中心に位置する廟を中心に住民が強く結束. 【震災以前の利点】 | |
| 19 | ●人々はコミュニティに関することを執り行うために公部門に頼る習慣がついていた. 【震災前】 | G |
| 20 | ●震災で家族を失ったり, 震災後老人の世話に疲れた女性達. 【震災以降の問題】 | F(死傷者多数) |
| 21 | ●これといって地域の産業に特色のない地域であった. 【震災直後に共通する問題】 | A |
| 22 | ○歴史のある古い共同体. 【震災以前の利点】/●辺鄙な地域であり閉じたコミュニティであった. 外国籍の新婦がなかなか地域になじめない. 【震災前後に共通する問題】 | A, C, I |

*番号は図1・表1に対応. 問題の所在欄の英字記号は図2を参照. **は問題点. ○は震災以前の利点で震災後役立ったもの.



*図中の●は年表中の出来事と呼応し, 当該項目の契機になった時期を表す. 矢印は点線から実線に(太く)なるほどその傾向が強いことを表す.

図2 台湾における社会問題の所在とそのカテゴライズ(戦後台湾史⁴⁾と関連して)

いる⁷⁾。この問題意識について考えるために、数ある事例の中から特に、客家の事例でもなく、先住民族の事例でもない「外省人」と呼ばれる人々の事例である「大漣境農場」の事例を対象に選んだ。

(3)で取り上げる水里の事例は、防災それ自体について考える際に重要な事例である。一般に防災を考える際、危険な地域は都市・農村計画だけの文脈から見れば危険地域に指定をかけ集落全体を移転させるという1つの方法しかないのかもしれない。しかし、そこで暮らしている人々にとっては、地域は自分の生きて来た歴史そのものであり、土地に対する愛情や愛着をどうするのか、という問題が残る。

次章で取り上げる事例は、どれも「社区総体营造」の「総体」性について深く伝えることのできる事例であり、台湾の事例をもとに、日本でもさまざまな議論が出来るのではないかと考え、選択したものである。また、記述を行なう中で、台湾震災復興社区総体营造のキーワードとなると思われる概念については、文章中で以下の例のようにまとめた。(例：[E] カルチャル・ツーリズム) キーワードの前にあるアルファベットは、図1・表1及び図2に挙げた問題点に対するテーゼとも言えるべきもので、問題点を克服するための鍵となるものである。

3. 台湾震災復興社区総体营造の特徴的な事例

(1) 南投県鹿谷郷小半天社区—コミュニティ全体が民宿のまち—

小半天社区は、鹿谷郷の中の竹林、竹風、和雅という三つの村落を含む地域である。この地域の名前「小半天」は、この秋の空が美しく、生い茂る竹やぶに囲まれた秋の高い空を見ていると、まるで仙人になってしまうような心地になるほど美しい風景であるということから付けられたという。

この地域は「竹林」や「竹風」などの地名にもあるように、竹と筍を産出し、それを主な産業基盤としていた。以前はこれらの生産が順調であったため、小半天は鹿谷郷の中でも指折りの豊かなコミュニティとして知られ、美しい町並みを持った街を形成していた。その頃の孟宗竹の価値と言えば、1本の竹と、1升の米とが交換できるほどだったと言う。

しかし、現在では、竹も筍も中国大陸産の安い物が市場に出回り、それらと競争を行なうためには刈り取りにかかるコストを割るほど値段を落とさなければならない。竹や筍を刈り取る仕事は肉体労働であり、疲労も激しい。震災以前から、公的部門である經濟部中小企業処は、この地域に専門家を派遣し、住民と協働のアクション・プランを実行させようと計画を立てていたがその矢先921大地震が起こった。鹿谷郷も震災で大きな被害を受けた。地域住民は、震災からの生活再建について考えた時、自分達で産業の再建をなんとかしなければ、家計や生活の再建もできなくなってしまうという危機感を感じた。そこで、震災以前からこの地域に関わっていた經濟部企業発展処は、震災後も地域住民の会議と一緒に参加しこの地域の産業をどのようにに転換していくかということについて、地域の住民と一緒に議論した。[G] パワ

リックセクターと地域住民による会議の開催

毎回行なわれていた会議は、やがて自分の暮らしている地域の特色を知り、どのような方向へと地域の産業を転換させていけばいいかを学ぶための勉強会となってい

った。その過程で、多くの住民はこの地域の中にある歴史的な資源や景観の美しさという資源が、他の地区に比べて非常に豊富にあるのではないかとすることに気がついた。そういった経緯を経て、住民の間で今後の経済をツーリズムの方向で創生して行こうというコンセンサスが取れはじめた。そこで、それらのことを行なうために「小半天発展促進会」を成立させたのである。[G] 官展

協働の地域の資源を知るための地域学習会

ツーリズムを発展させるためには、地域の環境が美しく清潔でなければならないと考えた住民達は、自主的にコミュニティの環境改善計画を行なった。地域で有り余る程取れる竹を使って花壇や門などを作り、街を飾ったのである。また、促進会を初めとする地域の人々は、清掃隊を組織して、1週間に1度協力して地域を掃除した。また、小半天にある竹林の美しさを知っているコミュニティの住民は、それを壊さないように、付近に自然の石を並べて散策のための小道を作った。

[D] [G] 住民による自発的な住環境改善活動

また、コミュニティの人々は、竹やぶや小道以外にも小さな滝や茶畑など、景観を構成する要素として大切な地点の周りを美しく保つように心がけた。そしてこれらのスポットとスポットをつなぎながら、それを地域の観光動線と考えた。[G] 住民の自発的な観光資源発掘

こうして、ツーリズムを推し進めるための環境は少しずつ整って来たが、生活再建のためには、どういった方向に産業をシフトさせなければならないかという問題が残った。その時に考えられたのが「民宿」を運営する、というアイデアであった。この地域で現在運営されている民宿は、小半天の農家を少しだけ改造したものである。また清潔感を保つため、そして観光客の間で他の民宿に泊まった人との不公平感が出ないように、蒲団などは統一の規格のものに決めて使っている。そういった物品のマネジメントも促進会が行なっている。このような経緯を経て同じコミュニティに同業者(民宿の経営者)が多く居るという状況の小半天であるが、小半天では、サービスの品質を出来る限り低下させ効率を争うことではなく、どれだけ親切に、暖かく客人をもてなせるか、と言う「良性的」競争、気持ちの上での競争を行なっていると言う。小半天の中では、どこの民宿に宿泊しても値段は同じである。外部の人達が民宿にアクセスする窓口は1つで、資源はコミュニティで民宿を運営する人々の中で平等に分配をする。また、資源を等しく分配した後の余りの収入は、公基金として、民宿を運営する人々の共有の財産として管理をする。[G] 共同型民宿の経営と公基金制度

[A] 民宿による就業機会の創出

また、ある民宿が他の民宿に来た旅行者と一緒にもてなすことも日常茶飯事である。民宿のオーナー達は、そこで、伝統的な楽器を引いたり歌を歌ったり、竹筒で作った打楽器などをかき鳴らしながら客人を小半天のやり方でもてなすのである。また、住民達は今、ツーリズムを進めながらも、今も冬にも春にも筍を取る暮らしを行なっている。地域に暮らす老人達は、筍を刈る技術や、美味しい筍をどのようにして取るのかについて、地域の暮らしや習慣の話などを含めて語ってくれる。また、竹筒飯という竹筒で蒸されたおこわを食べることもできるし、実際に竹に触れて竹細工を作ることもできる。竹細工として作られたランタンは、夜の小半天の街を彩り、新たな美しい夜の景観を創出している。

台湾の人々はこの小半天のツーリズムを、休閒旅行(レジャー・ツーリズム)と呼んでいる。しかしこれは

立派なエコ・ツーリズムであり、カルチュアルツーリズムであると言える。**[E]カルチュアル・エコ・ツーリズム**

(2) 清境農場(清境社区) — 「族群」を越えたと震災復興まちづくり

南投県仁愛郷の清境農場は、海拔1500メートルのところに位置する農場である。1966年に、行政院を定年になった「榮民(退役軍人)」達が、集団でここにやって来て農場を開発した。それが清境農場である。清境という名前は、かつて蒋介石が台湾で行政院院長であった時に名づけた名前で、その意味するところは静かで空気が良く太陽の光の美しい場所であるという意味である。

この清境農場とそこで働く人の居住地区を含め、清境社区と呼ぶが、ここでは、苦勞してこの地域に落ち着いた人の歴史の痕跡が残っている。ここに暮らしている人達はもともと「滇緬遊撃隊」として1961年に中国から渡って来た人々である。中国語で滇とは雲南省を、緬とはミャンマーを意味する。この人々は、蒋介石が中国大陸から台湾に渡った1949年以降も国民党軍として、雲南・ビルマに取り残され、孤軍奮闘していた部隊に参加していた人々である。そして、1961年にやっと台湾に渡ることが出来たのである。すなわちこの人々は、いわゆる「外省人」である。このような歴史を持つ清境農場であるが、他の台湾の農村が持つ問題と同じく、震災以前は農業以外に就業の機会のないこの農場から、若年人口は流出していた。

一方で、この地域に入って来て住みたいという若い世代の人もいた。現在の清境村の村長もその1人である。彼は海拔1500メートルで夏も涼しく空気が澄んでいるというこの環境と美しい景観に魅せられ、都会からこの地域に移り住んだ「新清境人」「新移民」と呼ばれる人々である。この地域の「新清境人」「新移民」の人々が中心となって、ツーリズムを推し進められないかということを考えているところに、地震が直撃した。**[A]ツーリズム**
概要この地域は海拔が高かったことが幸いして、地域の中では比較的軽微な被害が起らなかった方である。しかしながら外部との交通が寸断されてしまい、地域の主要な収入源である農作物が売りに行けなくなってしまった。また翌年、それに続く台風の被害にあい、多くの樹木がなぎ倒されて山や農場が荒れ果ててしまった。

「新移民」達は都市に生活をしてきたこともあって、外部にたくさんの知り合いや人脈を持っている。メディアが報道したことも手伝って、この荒れ果てた環境を片付けるために台湾の全国各地から、250人以上ものボランティアが集まり、3日3晩この地域の清掃を手伝った。これらの活動で出たゴミや倒壊した樹木は実にトラック400台分であったという。

さて、これらの外部のボランティアとの協働活動は主に「新移民」達が行なったものであったが、元滇緬遊撃隊の人々も全国から来た250人余りのボランティアに対し、泊まる所を提供し、炊き出しを行なった。ボランティア達が食べたものの中には雲南省の料理である雲南冷麺があったことが印象的であったと「新移民」の1人は言う。また、農場で野菜を売っていた元遊撃隊の人々は、野菜や果物を売って一万元のお金を作り、それを炊き出しや震災復興に使うための費用とした。**[B]違った立場の人間が自分に来ることを行なう****[G]公部門に依存しない**その後これまであまり行なわれていなかった「新移民」同士の対話、そして「新移民」と「遊撃隊」及びその子孫の間で対話が行われるようになって行く。**[B]「族群」⁽⁷⁾を越えた**

人間同士の交遊と対話

そしてその過程で、震災以前の構想になっていたツーリズムの発展がもう一度推し進められて行くことになった。2001年には地域の中で観光促進会が出来上がり、住民同士が協働で観光マップを作成した。民宿も開かれた。もともとの地域で民宿を開いていた人のほとんどが「新移民」の人々であるが、「新移民」の人々は、農産物の販売がなかなかうまく行かない、という現状を抱える遊撃隊の子孫の人々達と一緒に民宿経営の方法を学び、共に育って行くことを目標としている。**[B]違った「族群」**

の人々の協働によるツーリズムの推進

もと遊撃隊の老人は、自分が遊撃隊であった頃の古い写真や資料などを集めて自分達の郷土史を書き始めた。そしてそうやって蓄積した資料を集めて、地域の中に小さな資料館をオープンさせた。また、遊撃隊の子孫達自分達のルーツである中国大陸南部の踊りを学んでいる。

[B]、[E]生きている人間の歴史とつながるカルチュアル・ツーリズム

[B]、[E]忘れられた文化の発掘、地域の小さな博物館、[B]、[E]ヒューマンスケールの「小さな歴史・文化」の尊重

(3) 水里郷永興社区—自主防災コミュニティ

南投県水里郷永興社区は、濁水溪という河川の隣に位置し、176世帯がこの地に暮らしている。人口は400人程度である。バナナや梅などを生産するこの村はのどかな農村の景観を持った美しい地域である。しかし1959年の8月7日に発生した八七水害以降、この地域では地震や台風など天災が絶え間なく訪れる地域と化してしまった。この地域は山のすぐ下に位置し、近くには川が流れているため、921大地震の際には、至る所で道路端の崖が崩れ、交通は寸断し、多くの家屋が倒壊した。

この地域は毎年の雨の量が多く、崖が多く、また土石流の原因となる土石も多いという悪条件が重なっているために、農業委員会水土保持局から土石流敏感地域として指定された。当初専門家や公部門は、この地域の住民達に村落移転、転居を進めた。しかし村の人々はこの土地に愛着があり離れたくないという意見を固持した。**[E]住民への土地への愛着**

そこで、農業委員会は土石流の専門家に委託し、土石流が起こりそうな場所と、土石流がどのように流れていくかについての予測研究を行うことにした。そして、その研究を元に、住民の災害時における安全な避難経路を導き出すこととしたのである。この調査のプロセスには住民も参加した。この研究に関わった中興大学の専門家は以下のように述べている。「村民が村を離れられないのであれば、村民はこの地域に暮らしながら平和的に災害と共存して行くしかない。災害が起こった時にすぐに逃げられる方法を学習しながら。」**[G]専門家のパラダイム・シフト・住民意見の尊重**

この地域ではこのような綿密な計画に沿って建てられた避難訓練が行なわれている。この訓練はいつ起こるか分からない災害に備えたものではない。明日起こるかもしれない身近な災害に備えた、真剣な避難訓練なのである。また台湾のことわざで「遠水救不了近火(遠い所の水では近くで起こっている火事を消すことはできない)」と言われるように、ここで起こる災害は公部門がたどり着くのを待っている、助からないことを地域の住民は知っている。それゆえに訓練1つ1つに対して真剣なのである。**[G]住民自身の防災訓練への真摯な取り組み**

この地域では、この3年以内の大きな災害に見舞われた際、1人の死傷者も出していないという。これは、こ

の地域の自立的・自律的な防災訓練と、それを相互に励まし合っている専門家・公部門との協働の成果であろう。
【G】行政・専門家・住民のパートナーシップ

4. まとめ

(1) 事例から学ぶこと

小論では、第2章において台湾震災復興コミュニティ総体營造の概観から、台湾の歴史的背景が原因となった社会問題の中で震災を機に露呈したものが多くという特徴について言及した。また第3章においては、それぞれの事例を民族誌の形で詳細に記述し検討した。それらの問題とその克服のために払われた行政・企業・住民の努力についてまとめると表3ようになる。

表3 震災復興コミュニティ総体營造の特徴

| 問題点 | 問題点解決に向けてのアプローチの方向性 (第2・3章の事例から示唆されること) |
|-----|---|
| 【A】 | ◇地域の資源を発見し、それを住民の雇用に結びつけることのできる専門家の存在/◇異なった行政セクションがさまざまな補助メニューを使ってそれを支援出来ること。/◇住民が地元で働けることに自信を見出せること。 |
| 【B】 | ◇外部の人々や専門家の地域文化への深い理解、個性のあるさまざまな地域を「被災地」と一からげにしない。/◇違った民族が住む地域に暮らす人々が対話の出来る共通の話題を探ること! |
| 【C】 | ◇先住民族には先住民族の中で伝承されて来た文化的コンテクストがあるので、専門家・プランナーが関わることによって、地域の文化的コンテクストを消失させないようにする。また職能を評価する人々は、地域の文化的コンテクストを読み解く能力をも含めてプランナー・専門家の職能とする。 |
| 【D】 | ◇専門家による公署防止技術、環境技術の提供の能力/◇地域の自然環境の特色を見ぬき、それを地域内部の人や旅行者に理解してもらう手法の確立⇒エコツーリズム・カルチャール・ツーリズムの手法への学び。 |
| 【E】 | ◇国レベルの「大きな歴史」、考古的な「太古の歴史」への認識とともに、「小さな歴史」及び今生きている人の「ライフヒストリー」も大切な文化の構成要素として考えるという姿勢。/◇住民は、生まれ育った土地への愛着を持っているものである。/「被災地」とか「被災地文化」ということで数々の個性ある地域を十把一絡げとしない。 |
| 【F】 | ◇被災した人の家屋倒壊・心のケアという問題について、専門的なケアを行なう/◇それとともに、他の分野と連動した活動(例:住宅再建と地域に暮らす人の想い出の風景の再生、心のケアと芸術活動)などを行なう。 |
| 【G】 | ◇公部門に対し、単に不平不満という形はなく、民主主義的な方法論にのっとり意見を反映する形を住民自身が学ぶ。/◇行政・プランナーは住民の中から出てくるまっとうな要求に寄り添う形で仕事を進め、住民と対話を行なう。その能力も含めて専門家の職能となる。 |
| 【H】 | ◇専門家は、専門的な技術を研究することだけでなく、地域住民が地域の自然について理解することのできるような、教育・普及活動のセンスを持つ。 |
| 【I】 | ◇女性が学ぶことのできる場を増やす。/◇「学び」という活動によって女性が外出する機会を増やす。/◇学んだことが女性の収入源にもつながり、そのことが女性の経済的な自立の支援にもなるようにする。 |

*問題点の欄にある英字は図2・表2に対応している。

(2) 台湾コミュニティ総体營造のいま

冒頭に書いたように「コミュニティ総体營造」は、地方でレベルでのさまざまな試行錯誤の経験を参考に、1994年に行政院文建会でその政策が提出されたことに始まり、震災によってその「総体性」の重要性が強調され、新しいステージに移行したと言える。1994年当時文建会の副主任委員を務めていた人類学者の陳其南は、2004年5月の人事異動によって当該会の主任委員となり、さらにコミュニティ総体營造に力を入れている。もともとは法律のない政策であった「コミュニティ総体營造」は、現在法律として制定されるべく台湾の中央機関行政院・立法院で審議され、今年末にも法制化の見込みであるという。この法律において特に強調されることは、「コミュニティ総体營造」が文建会だけの政策ではなく、農業委員会や經濟部、環境保護署など、関連する行政機関がそれぞれの立場において関連項目に積極的に関わって行くことを目標としている⁽⁹⁾。このようにコミュニティ総体營造は、震災を機にその「総体」性の必要性についてますます注目されているのである。そもそも震災復興の問題は、住宅再建、生活再建として個々に議論していく必要性、また社会調査で得られた統計データを数字として処理して行くことも大切であるが、一方で、地域の個性や特徴に目を向け、いわゆる「被災地」に暮らす人々が、その土地において自信を持って再び生活を営めることを復興における大切な目的の1つとして考慮に入れなければならない。当然のことながら、「被災地」はもともと「被災地」だったのではなく、人々がそこで生まれ育ったり、嫁いで来たり移動して来てそこで働き出したりして人々の故郷となった場所である。そこには当然個々の歴史や文化がある。また一方で人々が暮らして来たことの蓄積は、歴史や文化とともに社会問題を生み出す。ある日突然震災の被害にあってそれまで持っていた問題が露呈した地域も多い。そういった問題の解決について、都市計画変更や、集落を危険地域に指定し移転させるだけでは、単一的・暫定的な問題の解決にはなっても、長期的な問題解決の方法にはならない場合も多い。台湾は、行政としてそのような問題に気がつき、自然・文化・歴史をストックと考えそれらのストックを利用することを政策や法制度の中に盛り込んで行こうとしている。また、そういった「まちづくり」の問題について、行政が縦割りで仕事を行なうのではなく、横の連携を取ってまちづくりに従事しようとしている。政府がこのような活動を支援してくれることは、住民にとってみると、自分の活動や、故郷へのエールであり、また自分自身が生きて来た歴史について他者から認められることにつながる。この部分が台湾の震災後のコミュニティ総体營造のユニークさであり、台湾と日本の行政・専門家・市民・住民のレベルでこの点について議論・意見の交換や交流が進めば良いと思う。小論がそれに役立ち、現地踏査の参考となることを願う。

補注

- (1) 日本の文化庁に相当する機関。以下「文建会」と略す。
- (2) 例えば、行政院政務委員の林盛豊は「震災復興において大切なのは、以前と同じようなコミュニティになるよう、急いで再建を行なうことではなく、『以前と同じようなコミュニティになるよう再建することが果たして良いことなのかどうか』とい

うことについて考え直すことから出発し、時間をかけてでもコミュニティの自律性・自発性を伸ばして行くことが大切だ」と述べている。(記録フィルム, 行政院文化建設委員会: 呉念真, 「我們的故郷, 我們的故事」, 第8巻, 2002より)

(3) 台湾中部, 南投県の中興新村にある台湾歴史資料館の一部に設けられた資料室には, 専門的に台湾の震災復興に関する展示空間がある。ここには震災復興社区総体营造に関する展示ブースがあるが, この展示パネルの訳にも「Integrated Disaster Reconstruction」と書かれている(2003年11月現在)。

(4) 例えば台湾研究を行っている若林は, 社区総体营造は「Community Renaissance」と訳しているし, 台湾宜蘭県で1997年に行なわれた社区総体营造博覧会を記念して出版された冊子のタイトルの英訳にも「Community Renaissance」が使われている。このことから, 若林の著作が触れているまちづくりも, 社区総体营造博覧会に関する冊子を発行する中心となった人々の所属するコミュニティも, どちらも台湾東部海岸に近い地域で起こっていることのようなので, この頃は, まだ, Integrated ということが強調されていなかった時期であるのかもしれない(若林正文: もっと知りたい台湾, ppi-iii, 1998より)。

(5) 文中の事例については, 江鴻儒: 台湾社区総体营造の軌跡, 台湾まちづくり研究会, 2004. 及び, 服部くみ恵: 住民主体の小さな文化遺産の保存活動住民主体の小さな文化遺産の保存活動—台湾「二結」から日本のまちづくりへのメッセージ, 「住まい・まち学習」実践報告・論文集5, 住宅総合研究財団 2004, などを詳しい。

(6) 前述の記録フィルム, 行政院文化建設委員会: 呉念真「我們的故郷, 我們的故事」, 全8巻, 2002による。

(7) 「族群」とは, 民族やエスニックグループなどのことを言う。戒厳令下の「中華文化復興運動」「社区発展」では, 地方の文化や「族群」の多様性は尊重されてこなかった。また図2の年表で見られるように, 以前の文化政策は, 「中華文化復興運動」や「社区発展」のようなものがあるが名前の通り, 「中華文化復興運動」は, 中国風の文化のみに焦点を置いたもので, その他多様性のある文化は尊重されてこなかったと言える。また「社区発展」政策は, 地域にコミュニティセンターを建設するなど, いわゆる「ハコモノ建設」の運動に終始したため, 逆に先住民族などの祭祀空間などを文化的に重要なものを破壊してしまうことも多かった。(中央社「新聞百科」のホームページなど参照。

<http://news.pchome.com.tw/life/cna/20030812/index-2003081218110180276.html>, アクセス日 2004年9月2日)

(8) 2004年9月2日に筆者が行った文建会へのインタビューより

参考文献

- 1) 黄煌雄他: 社区総体营造体検調査報告書, 遠流, p5, 2001.
- 2) 行政院文化建設委員会: 社区博覧会的故事, 文建会, 1997
- 3) 服部くみ恵: 台湾921大地震の震災復興とエンパワーメント, 立命館大学政策科学研究科修士論文, 2001
- 4) 呉密察: 台湾史小辞典, 遠流台湾館, 2000

(原稿受付 2004.5.21)